

深川の年中行事

江東区深川江戸資料館

年中行事とは、毎年同じ暦時に繰り返し行なわれる信仰を中心とした行事のことをいいます。江戸時代には五節供も盛んになり現在よりも暦との結びつきの深い生活がありました。また、現在は太陽暦ですが、当時は陰暦が用いられていたため月の満ち欠けが行事に影響していました。

江戸末期、天保の深川ではどのような行事が営まれていたのでしょうか。ここでは季節ごとの代表的な行事を紹介します。

1 春の行事

大晦日の忙しさから一夜明け、各家では静かな新年を迎えます。夜通し起きていた商家の人々はそのまま初詣にいき、屠蘇を祝い、雑煮を食べて休むものも多かったようです。雑煮・福茶は「若水」といって元旦に初めて汲んだ井戸水で作りました。福茶とは甲州梅・大豆・山椒を二、三粒ずつ入れて煮たものです。一般的に六日までを松の内といい、松飾りも六日の夕方に取り除かれました。



「東都名所洲崎初日出の圖」(一勇齋國芳画)

深川らしいものとしては、洲崎での初日の出参拝があります。『江戸府内絵本江戸風俗往来』には「深川の洲崎堤上は、都下に聞えし朝日影の名所人の出殊にすぐれ、実に今朝の日の出は立春の

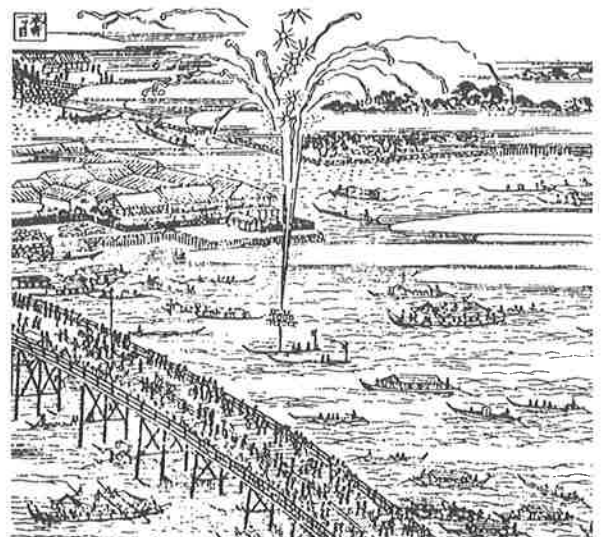
空に一陽の影現わるるや、海面静かなる白波に紅の影を浮かべ、鷗また明鳥の飛びける光景、これ江戸三百年の太平楽、目出度き御代と知られたり」とその様子が記されています。

そして元旦には特に多くの人々が深川八幡宮に詣でました。また、2日には船乗初、13日には深川神明宮の祭事が行なわれました。

2月に入ると、初午の日には稲荷祭で江戸中賑わい、なかでも、日比谷・烏森の稲荷が有名でした。深川では、『東都歳事記』に黒船稲荷(現江東区牡丹)の名があります。

2 夏の行事

夏は江戸時代も、潮干狩、夕涼み、富士詣りと行楽を楽しむ季節でした。そして、隅田川での納涼に先立って行なわれるのが「川開き」でした。川開きは江戸末期にはじまりましたが、しだいに梅雨の終わりと夏の到来を感じさせる行事として江戸の人々の間で定着し、玉屋・鍵屋の花火はそれを一層盛大にさせました。隅田川の納涼は5月28日に解禁されたあとは8月28日まで続き、この時季川面は船遊びの屋形船や猪牙船でいっぱいになり、広小路となっていた両国橋付近には涼み茶店、見世物興行、諸商人の露店が出て盛況でした。



両国川開き『江戸名所図会』

3 秋の行事

江戸の秋は、七夕、お盆、月見、八幡宮の祭礼と行事が続きます。新暦に改められた現在では、七夕、お盆、祭礼は夏、月見は秋という感覚がありますが、江戸時代では7・8月（現在の8・9月）の短期間に行なわれる秋の行事としてありました。因みに、江戸時代と現在の行事の流れを較べてみると下のようになります。

江戸	現在
6月	7月 七夕 お盆
7月 七夕 お盆	8月 祭礼
8月 月見 祭礼	9月 月見
9月	10月

お盆は、草市で始まります。草市は盆市とも呼ばれ、7月12日の夜から13日の朝まで開かれました。竹・粟穂・稗穂・茄子・紅の花・青柿・青栗



富賀岡八幡宮祭禮『東都歳事記』（斎藤月峯）

・瓢箪・菰造り牛馬・燈籠・盆提灯・線香・数珠・仏壇の漆器類などが売られ、深川でも広く行なわれました。そして13日から15日までご先祖様を迎え供養しました。

深川八幡宮の祭は、江戸の三大祭の一つとして現在に至るまで継承されており、本祭の年は深川の町中が活気に満ちあふれます。54基の神輿が掛け声とともに練り歩く様は精悍です。江戸時代、この日は十五夜の月見でもありました。現在の9月にあたるため、今よりも秋の趣が増すなかで行なわれたのでしょう。『江戸府内絵本江戸風俗往来』の「十五夜八幡祭」の日の記述には「盆提灯毎夕の点火終わるや、日脚も短く、朝夕に冷氣相加わりけり」とあります。

4 冬の行事

11月に入ると、酉の市が開かれます。酉の市は正月を迎える行事の始まりとして意識され、蔵前の大鳥神社が有名ですが、深川の富岡八幡宮でも行なわれています。

以後、新年にむけ慌ただしい日々が続くようになります。12月13日には煤払いが一斉に行なわれ、15日からは餅つきが始まりました。??日頃から大晦日までは杵の音が絶えなかったといいます。社寺や武家などは定めの日で自家でつきましたが、その他は貸餅または引きずり餅を頼んでいました。貸餅とは菓子屋のつく餅、引きずり餅とは臼や杵を持ち歩いてその家の前でつく餅をいいます。松飾りは、大店などは抱えの蔦に任せましたが、一般の家では各自で行ないました。

そしてこれら注連飾りなどを含め年始に必要なものを商うのが年の市でした。江戸市中至るところに市は立ちますが、その初めが12月14、15日に開かれる深川八幡宮の市でした。年の市は一年の終わりにある市でもあり、よい新年を迎えるための市でもありました。大晦日の市は捨市と言われ捨てるような安値で売られました。

大晦日の夜は商人が忙しさにおわれるうちに明けていきます。